

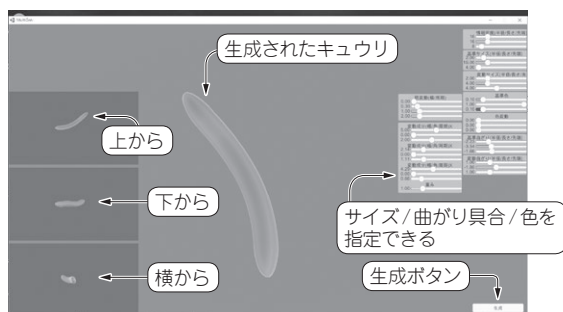
VR/マッピング/AI用画像…
これから使いどころ広がる

3D時代のコモンセンス!

画像編集ソフト「Unity3d」

ご購入はこちら

佐々木 弘隆



(a) 筆者提供の自動生成画面



(b) 生成されたサンプル・データ

図1 広がる3D画像の使いどころ①…集めるのが大変なAI学習画像の自動生成

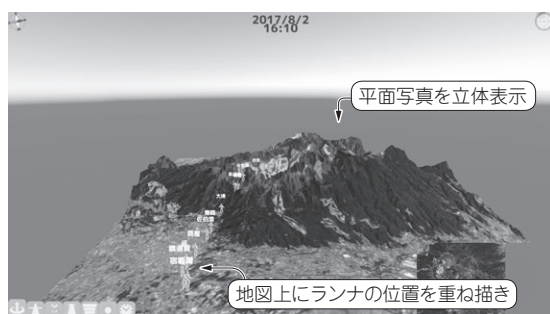


図2 広がる3D画像の使いどころ②…GPS位置データの3次元地図表示

● 3D画像時代がやってくる

3D画像といえば、従来はゲームやアニメーションに使われることが多かったのですが、これからはそれだけではなく、VR/ARから360°カメラ、3Dマッピング、3Dスキャナ、3Dプリンタ、AI学習用画像の自動生成など、さまざまな用途で求められます(図1, 図2)。

3D画像を扱うには、専門的な知識が必要ですが、最近はそのなりに簡単に使えるソフトウェアも出てきています。本稿では3D画像の編集が行える代表的なソフトウェア「Unity3d」の特徴や最低限の使い方を紹介します。

(編集部)

「Unity3d」とは

● 元々は3Dグラフィックスのための開発/実行環境

Unity(ユニティ)という言葉を目にするようになってきました。これそのものは「単一」などの意味を持つ英単語なのでいろいろな用途で使われるのですが、開発の現場でユニティと言えば、9割方「Unity3d」のことを指しているようです。

Unity3dと書きましたが、今では公式の方でも「3d」を省略して「Unity」だけの表現になっているので、どちらの表現でも間違いではないようです。米国のユニティ・テクノロジーズによって開発されている統合開発環境を持っているゲーム・エンジンです(<https://unity3d.com/jp/>)。日本を含む世界各地に事業所があります。

当初はMac用の開発環境でしたが、現在は開発環境も実行環境もマルチプラットフォームに拡張されました。そして「3d」と付いている通り「3Dグラフィック」が実行可能な開発環境です。

従来3Dというのは高度な技術を要求する専門分野でした。しかしUnityは難しい3Dを比較的楽に使える仕組みが用意されています。

またソフトウェア開発は文字通りソフト(プログラム)を書く必要があるのですが、やはり従来は専門の知識があるソフトウェア技術者しか触れない領域でした。ですがUnityは、簡単な処理であればソフトウェアの専門家でなくても作成できる仕組みが用意されていま